

## 鷺田小彌太先生講演会 「学生と読書 読書のある人生ない人生」

\*2010年6月5日 長崎ウエスレヤン大学西山ホールにて

鷺田です。昨年夏は、調査で肥前の鹿島に来ました。その時は、むちゃくちゃ暑かったんですけど、今年は暑いといってもたいしたことないですね。図書館司書の植松さんからお題をいただきました時は、非常に大きすぎる題であるとおもいましたが、なるべく、皆さんのご期待にそえるような話ができればいいと思っています。

最初に、私の母について話をしたいと思います。非常に良い母でした。良い母、という意味は、子どもを盲愛して、「お前は世界で一番いい男なんだ」ということを、ずっと言い続けてくれた。他の誰も、一言も私を褒めてくれませんでした。母だけは存在自身を褒めてくれました。私自身は、母に叱咤激励され、鞭打たれたという思いが強いのですが、母が死んでから聞いた話では、他人にはいつも私のことを自慢し褒めていたようです。

そのような母から私は生まれましたけれども、非常に大げさな言い方をすれば、私には二度目の誕生というものがあります。それは、私が本から生まれということです。断言していいと思っています。それで序のところで、私の読書暦をちょっとだけお話したいと思います。これは特殊でもなんでもありません。

私は人口 5,000 人くらいの純農村地帯に生まれました。札幌の近郊です。戸数が 900 戸ほどですから、まち全部の家の家族構成が分かる。ここで子どもが生まれた、この子は中学校落ちた…そういったことがみんなよく分かるんです。どこそこのだれが今日電車に乗って札幌に行き、買い食いしたなどといったことまで逐一知られてしまうような、そういう環境のなかで育ちました。

私の父も母も、中学校を出て…昔の中学校は今の高校ですけれども、村ではいっぱしの知識人であったと思います。口も達者だったし、人の前で大きなことをよく言っていたのを記憶しております。商売をしておりましたから、人付き合いも良かったと思います。

私の家には、おじさんおばさん含めて 20 人くらいいました。けれども、家に 1 冊もハードカバーの本がありませんでした。父は 68、いま私の歳で亡くなりましたし、母は 85 で亡くなりましたけれども、おそらく父も母も一生で 1 冊もハードカバーの本、つまりきちっとした本を買わなかったと思います。それでも両親は立派な人生を送ったというふうに私は思っております。

ところが、私は、たしか 9 歳くらいのときだったと記憶しておりますが、こ

れから自分が歩いていく人生上のことを父と母に相談しちゃいけない、というふうに思ったのです。不遜でしたが、独断です。

ただ大学に行くときだけは、ストレートに学費を出してくれとは言いませんでしたので、この大学に行きたいと事前に相談しました。まあ、それもやはり断言のようなものですね。

なぜ、大学に行きたかったかといえば、なんとしても家から逃げ出したかったからです。我が家は、人口 5,000 人のまちでも、かなり大きな商家をやっており、姉弟の中で男の子は私一人ですから、家業を継がなければいけなかった。したがって、合法的な家出の唯一の方法が、良い大学に入ることだったんです。東京の大学は北海道から割りと近いんですね。親戚もたくさん住んでいるから、連れ戻されるという可能性もあった。それで大阪か九州ということになった。でも九州大学の先生方にあんまり好きな先生がいなかった。それで大阪大学を受けたのですが、ものの見事に落ちました。2度も落ちました。したがって 18 歳までの私は、受験雑誌・受験の本以外の本は、ほとんど手に取ったことはありませんでした。たまに勉強以外の本を読むときもありましたが、何か隠れて読むような後ろめたさがありました。

大阪に行った動機は他にもあります。1 つはちょうど「文学界」という雑誌に、開高健が「日本三文オペラ」という小説を連載しだした頃だったのです。これを読んで、日本には、こんなすごい人間たち、いいかげんな人間たちがいる街があると驚いたんですね。そして、これを書いた開高健に会ってみたいと思いました。私より 10 歳上なんですけど、私が大阪に行ったときはもう芥川賞を貰った後で、大阪には居ませんでした。

なんとか家を脱出し、大阪での浪人生活がはじまりました。結局、この生活は 2 年間続くのですが、時間があるというよりも寂しいんですね。何かしなきゃと思って、映画を観ると本を読む以外にない。人付き合いが出来ないんです。大阪の人、というか、関西の人と。その後、私は大阪に 23 年間居りまして、自分自身はほとんど大阪の人間になっておりますけれども、当時はそうだった。

ですから誰にも会わないので、仕方なく映画の 3 本立て 4 本立てを 2 回りくらい観ていました。でも映画ばかりは観れない。ちょうど下宿先の近くに、食堂があり、その前が映画館で、その横に貸し本屋だったんです。お金もなかったですし、飯を食うか、映画を観るか、それとも本を借りるかという三択を毎晩やって、そのなかで本を読んでいました。寂しさで、それを癒すために読んでいたわけですが、その頃読んだ本は全然覚えていません。しかし本があったおかげで、ノイローゼにもならなかったし、大阪を逃げ出して北海道に戻ることも無かったと思えます。

大学は経済学部を2度受けました。私は受かったと思ったのですが、大学の方が気に食わなかったらしくて落とされまして…。3度目は文学部を受けました。哲学科に進んだのですが、当時、文学部の学生は三分の二が女性でした。

文学部に入って気がついたのは、自分の書棚に全く本が入っていないことでした。もしも誰かが家に来て、本棚に参考書しかないのを見られたら恥ずかしい。そう思って、石橋駅のガード下にあった古本屋から、店先で売っていた荒縄でくくられた30冊ほどの本を買って、家まで担いで運び、ようやく書棚に並べてほっとしたということがありました。つまり文学部に入ったときに見栄で本を読み始めたというのが、私の読書人生のはじまりでした。

それでも文学部ですから、とてつもない難しい本を原書で読まされたり、原語で読まされたりします。友だちと話すときには小説の話をしなくてはならないから、それも読む。あるいは学生仲間で雑誌を出して、書けない小説まで書いてみたり。これまで全く文学少年ではなかったのですが、自然と本を読むようになりました。勉強においても論文を書くために、本を読まなければならない。それはいわば *Arbeit* (労働) です。つまり仕事のための、読書のための読書です。あるいは、見栄のための読書ですね。

当時のことで、こんなエピソードもあります。いま、インド哲学で兵庫県立大で教えている同級生がいるのですが、なぜかわかりませんが、3年生のとき毎週土曜日に来て、カントの『純粋理性批判』を借りて行くんですね。緑色の濃い表紙の非常にすばらしい本なのですが、それをちょっと貸してくれと、読みたいところがあるからと言うんです。ところが、後から聞いたら、デートのときに、それを持って行って、喫茶店のテーブルの右側にポンと置く。要するに彼は、見栄を張っていたわけですが。しかしそれでも、本を読む動機にはなつたと思います。

大学生活も4年間経ってみると、勉強は1~30番まで全部女性でしたが、彼女たちとは、もう議論ができなくなっていました。普通の知識人としての議論ができないのです。どうしてなのかよく分からなかったのですが、あとから気が付いたのは、どうも彼女たちは学校の勉強のための本しか読んでいない。*Arbeit*、つまり論文を書くためだけにしか本を読んでない。だから冊数が限られてくるんです。お互いに専門同士の本の議論は、多少はできるかもしれませんが、違うジャンルの人とは議論ができない。つまり、彼女たちは、雑書と呼ばれているいろんな分野の人とクロスオーバーするような読書をしていないのですね。私の場合、4年間経ったら、部屋ではもう寝るのははばかれるていどには本がたまりました。

それから大学・大学院を卒業し、33歳まで就職できません。要するにアルバイト生活です。朝・昼・夜と非常勤講師をやりしながら、なんとか食いつなぐ

という生活を送りました。もちろん論文を書いたり、勉強はしていました。自分が書きたい、それから自分がいっばしの知識人になりたいという思いで、本を書こうという意識がありました。

ようやく就職したのが 33 歳のときでした。その直後、谷沢永一先生の本に出会いました。当時、全く名前も知りませんでしたから、本当に偶然です。東京に行く用事があって、神田で、古本と新刊を一緒に売っている店に寄ったところ、『読書人の立場』という非常に地味な本に目がとまったのです。桜風社という出版社で、新刊書でした。ちょっとインチキっぽい本かなと思いつつ、なんとなく開いてみたら、「開高健小論」というのが入っていた。どうもそれは開高健の全集というか著作集のあとがきを全部並べたものだ、これは面白いんじゃないかということで買い、帰りの夜行列車の中で読みました。地味な本でしたが、自分の頭をガツンと殴られたような気がしたんです。自分の今までやってきた勉強とか自分が今まで考えてきたこととか、そういうものを、この先生は、「違うよ、そんなことはゴミだよ」と言っているように感じてしまった。今読んでみてもどうしてそう感じたか分からないんですけども。それから谷沢先生の本を買って読みました。するするするっと 4 冊くらい私のもとに来るんですね。ちょうど先生の本が読まれ始めたときでした。

それから 33 年間、先生の本を読み続けています。いまは、僕の 7 段の書棚 1 台半くらい、谷沢先生の本が並んでいます。おそらく先生よりも僕のほうが読んでいるのではないかと思うくらいに、たくさんの本を読まされました。結局、先生が読んでいる本を読まないで、先生の真意が分からない。何のために自分が研究したり勉強したりするのか分からないと思ったこともありますけれども、先生を追っかけながら自分も少し成長していく。つまり私が 35 で谷沢先生の本に出会って、それから本格的に勉強しだしたときが、私の第 2 の誕生だというふうなことを言ってみたいわけであります。

しかし谷沢先生から一番教わったのは何かといいますと、「専門の書とか仕事のための書ではなくて、広く、自分の関心が湧く本を、それがたとえ自分の考えと相反していても手に取ってまず読んでごらん」ということです。

今日は読書のすすめなので非常に具合が悪いんですけども、私も谷沢先生も、図書館派ではないんですね。図書館から本を借りることを拙いな、と思う人種なわけです。図書館には、古い本とか、高い本、私がおえないような本があったらいいなとは思いますが、普通、私たちが買える値段の本は、図書館ではなくて自分で買おうとしたいのです。線を引いたり破ったり貼り付けたりする、いわば、自分の体の一部になるように本を読んでいきたい。これは別にカッパブックスとか漫画とかでも、もちろんいいわけです。特殊な素晴らしい本でなくても良いのです。マルクスの本に感動しても、それから白土三平の『カムイ

外伝』に感心しても、私はどんな本を読んでも、あるいはどんな小さな記事の切り抜きでも、その中に書かれていたことが私の血肉になるならば、それは読書だ、というふうに思っています。現在もそうしています。

そういう読書はほとんど暇つぶしです。偶然手に取って、空き時間、空白を楽しむものです。しかしそのように無意識に集めた読書体験は、なにより替え難いものです。

それと先生に追いつくための読書。つまり先生を人生の中で持ってほしいのです。それは学校の先生とか、特殊な先輩とかではちょっと拙いんですね。利害関係も生まれます。だから本の先生がいい。谷沢先生は私の先生だというふうに思っていますし、どうも先生も私を弟子だというふうに思ってくれているようなのです。しかし先生にお会いすることはほとんどありません。今、先生は82歳ですし、ちょっと立てなくなって、完全に引退されました。先生がおられる場所は、僕ともう一人くらいしか知らないかもしれません。だから先生に仕事をしてもらうわけにもいかないし、会いに行くこともできない。つまり何の利害関係も無い。そういう関係の中で、先生と本の中で付き合うのです。

一番いいのは、お酒を飲む相手でもいいし、ピクニックに行く相手でもいい、どういう相手でもいいけれど、本を介してつきあいたいですね。

僕よりも10歳くらい若い人が、よく行く飲み屋に来ます。先日も、サマセット・モームの『サミング・アップ』（岩波文庫 2007.2.）の新しい翻訳本が最近出て、それについて一生懸命喋っている。「若山さんこの本読んだの？」という、「読んだ」と言う。聞いてみると全く間違った読み方しているんですね。でも、そういう話が行き来して、今までと違った人間関係が生まれる。つまり本を介して出来た友達というのは、会社の仲間、仕事の仲間、恋愛の相手、学校の友人、あるいは兄弟関係ともまた違った独特の人間関係が生まれるんです。それはどうしてなのかちょっとお話したいと思います。

私は、1冊も本を読まなくても立派な人生を送ることができると思っています。私の父と母がそうでした。私は人生上のことを父と母に相談しませんでした、2人とも素晴らしい人生を送ったなというふうに思っています。

私も大人なる過程で、父と母に苦勞をかけ、苦しめたりしてきたわけですが、親を裏切ったり、世間に指さされたり、子どものことで家に怒鳴り込まれたというのはおそらく無かったと思います。それは小さいときに私が直感で、あっ、本を読まない人と議論をしても最後はゲンコが飛んでくるだけだな、というふうに、冷静に考えられたからでしょう。でも、もし父と母が本を読み、子どもの私とその本を介して議論が出来たらどんなに面白かったらうなというふうに思います。

小学校・中学校の先生方も、本当に田舎でしたから誰も本を読んでいません

でした。お前もそんなに読んでないじゃないかと言われそうですが、実は、後々小さい時のことをたどってみると、これが結構読んでいるのです。家には本はありませんでしたが、友達が持っていた本を借りて読んでいました。ちょうど大江健三郎さんとか石原慎太郎さんとかが新人として出てきて脚光を浴びていた時代で、先生からはあんな本読んだら不良になるから読むなと言われました。しかし私は、先生が「不良になるから読むな」と言うのだから、逆に読んでみようと思ったのです。ドストエフスキーの『罪と罰』なんかも、読んだという記憶は全然無かったのに、小6ぐらいのときに大人と『罪と罰』について議論したことを、急に思い出してハッとしました。俺ってすごかったのかなと。こういうところで笑ってください(笑)。

つまり、子ども心に、日常とは違う世界を、本の世界の中に覗いていたんだと思います。ただし、最初に言うておきますけれども、机上の空論という言葉があります。これはまったくその通りで、本を読まなかった人よりも、本を読むことによって害を得た人は、おそらく多いと思います。本を読まなかった人は別に他人に害を与えたり、それから、何か知らないけどもおかしなことを言ったりはしない。しかし本を読んだことによって他人を軽蔑したり、「俺はこんなに本を読んでいるんだ、どうだ、お前知らないだろ」なんて言う人がいるわけですね。本を読んだら高尚な人間になって素晴らしい人間になった、と思ってしまう。

ただし古い時代には、知識人とか、徳ある人というのは別名“君子”といました。君の子です。「君子豹変す」の君子であります。知識人、すなわち読書人という意味です。だから、本を読んだ人と読まない人の違いは何かと申すと、君子と小人の違いなのです。「小人閑居して不善をなす」つまり「女・子ども、本を読まないやつは暇を持て余して悪いことをするんだ」という意味だと平凡に解釈すれば、かつては本を読む人は立派な人で素晴らしい人間だといった定説がありました。私はそうは決して思っておりませんが、ただし、表で見えていること、あるいは現実に姿をあらわしていることとは、まったく違った世界があり、様々な人間や異なった考え方があるということを発見するのは、本の世界の中でしかできないことです。間接的な経験は、直接的な経験では取り替えることが出来ないのです。代替不能の世界なのです。

たとえば、私の場合、母親から、「こういうふうにあなたやりなさいね」と言われ、「それは違うよ、違うの世界があるんだよ、こういうこともあるんだよ」と返したとします。それは母親に対する反逆ですから、母はキーっとなって、「私はお前を産んでやったのに、なんて口を聞くんだ」と言うんですね。だから僕も冷静になって、「私はあなたに産んでくれって頼んだことはございません」と。すると母親は「何を言うか、お前は忘れたのか。私はお前が産んでくれって言

ったから産んでやったんだ」とくる。ついには、「お前を産んで間違っただ」さめざめと泣くんですね。素晴らしいですよ。もちろん演技だと思いますが、母の論理というものには勝てません。だからもう敗北であります。

しかし、そんな母を非難するのではなく、本を読むことで、私は、母と子の世界とは違った繋がりの世界を知りました。そして、そうした世界に参入しなければ自分は大人になれないのではないかという強迫観念にとらわれました。同時にその時、私は自惚れ屋ですから、「俺は知識人になったのかな」とも思いました。たしか 12 歳くらいだったと思います。

したがって中学校に入ったときには生意気な学生でした。田舎でしたから、先生方は教科書以外に本はほとんど読まず、夜になると酒飲んで、小さな道をワーンと騒いで歩いて帰るのを、鼻白む気持ちで見えておりました。

そんなふうな子どもでしたらから、先生の家遊びに行くと、まず先生の本棚を見る。ほとんど本は無い。学校の先生は給料が低かったから大変だったというのはあるのでしょうか。でも、やっぱりそれは言い訳です。私は大学生のころから、貧しくたって金が無くたって、飯を抜いてでも、本を買って読もうという気持ちを持ちました。

最近の大学生は本を読まない。読書をしない。そういうふうにする人がいますが、そういうことを言う人は、あんまり本を読んだことない人だなというふうに思います。1960 年、私たちが高校を終えて大学に入ろうとしたときに、大学生の数は高校生全体の 1 割だったのです。いまは全体の 5 割が大学へ進学する時代なのです。

僕の場合、文学部の 75 人の学生のうち、本をちゃんと読んで向き合い、それと対決していた人間は、田畑君と笹田君と僕とあと 2 人くらいしかいませんでした。つまり哲学科の学生くらいしかいなかったんですね。

ですからその当時は、本を読んでいない学生や教授らを「あいつら阿呆か」と思っていました。もちろんそれは誤りであったのですが、僕たちの友人は皆そうでした。たくさん本を読んだ人が素晴らしいというより、読まなければ世界が広がっていかないというふうに考えていたんですね。したがってそれは、机上の空論ですから、本を読んで頭でっかちになるのは、もう当然のことだったのです。ですが、頭でっかちにならなければ、自分の言った言葉と相手が言った言葉、さらに別の言葉であったり、そういった様々な言葉の交差の中で、世界や社会が出来上がっているということに、なかなか気付くにくいのです。

自分の意見を反対されたら、自分の人格を否定されるように思う人がいます。自分の意見を批判し、論破した相手を許せないと。もちろん私もそういう部類の一人で、負けても、次には絶対勝つてやろうとか、人間としてはあるまじき卑劣な心も抱くのですが、相手の意見が正しければ、イヤイヤながらも承服

せざるを得ない。それは、本を読んできたことで、世界には自分とは異なった、いろいろな言葉があると知ったからでしょう。

ではなぜ、そんなに言葉が大事なのか、書物が大事なのか。

書物は純粹に言葉だけで出来上がっています。そして、そこに書かれていることは、必ずしも現実の世界に当てはまるかどうかは分からない。それが言葉です。アイデアと言ってもいい。

ヒトはなぜ人間になったのか。直立二足歩行をしたことで、脳みそが大きくなり、道具を使うことを覚え、労働するようになったからだという意見があります。しかし人間は、いま証明をできない、論証できないことを、言葉にすることによって「人間」になったのです。厳密に言うと、人間と他の生物との違いは、言葉を操作することができるという点が決定的な違いなのです。

フランス革命のときに、14、15歳くらいと思われる狼少年が見つかりました。小さい頃に狼に攫われたのか、人に攫われて狼がそれを育てたのか分かりませんが、彼は言葉を話せませんでした。「ビクター」（勝利）という名前が付けられ、周囲は一生懸命言葉を教えようとします。しかし、彼は言葉をほとんど理解できないまま亡くなりました。

猿の中には、人間の言葉を理解する物凄い優秀な猿がいますけれども、それは人間が教えたから覚えたのです。つまり人間も言葉を教えなければ人間にならないのです。しかし我々は、人間社会、言葉の社会の中で育ちますから、おのずと誰でも一定の言葉を話すようになります。

日本人とは何者かといえ、日本語を話す人、です。日本語を話せない人、日本語を自由に使えない人は、日本人ではないと思って間違いありません。したがって、「ジャパニーズ」は「日本語」であり、同時に「日本人」ということなのです。「チャイニーズ」っていうのは「チャイナ人」であり「チャイナ語」であります。

私たちは、言葉を持つことによって人間になったわけですが、では、その言葉とは一体何なのか。それは「今ここに無いもの、未だ嘗てどこにも無かったもの」を喚起する、呼び起こしてくる能力のことです。つまり創造力、アイデアという力です。

しかし、ここで注意したいのは、このアイデアは、私だけのひらめきだとか、独創だと言ってしまうのは、今まであったことを全部調べあげて初めて分かることです。簡単ではないし、大変危険だということです。

田中美知太郎という哲学者がいます。本もたくさん出しているし、素晴らしいギリシア哲学者ですが、彼は、哲学はプラトンで全て終わっていると言いました。我々はプラトン先生から学び、それを正しく解釈すればよろしいんだというのです。

では、プラトンの本を読んで、現在の情報社会のことがわかるでしょうか。具体的には分かりませんね。ただ、情報社会が何で出来上がったかというのとは分かります。言葉で出来上がっているのです。アイデアです。1とナイを組み合わせで全部世界を構築してみようというのが、デジタル世界です。コンピュータ社会の基本の基本ですね。

ところが、この1かナイ、○か×かで示された世界というのは、実はプラトンの世界なのです。1…1はずっと足していくと、すべてのものが整数になる。整数を足すと、すべてのものが再構成されるという理論です。

ただし、さきほど言いましたが、情報化社会の具体的なことについては、プラトン先生の本を読んでも全然分かりません。ですから田中美知太郎先生が言っていることは、十分の一くらいは正しくても、十分の九くらいは正しくないともいえます。

それから、プラトン先生から2000年以上後になって、ヘーゲルという人が現れます。私もよく勉強させてもらって何冊か本を書いています。ヘーゲルもプラトン同様、「ヘーゲルで哲学は終わった」とよく言われる哲学者です。ヘーゲル自身が言ったのではなく、弟子たちや周りの人たちが言ったことです。

「最後の文人」とか「最後の芸術家」という言葉もよく聞きますが、本当にその跡に人が出てこないのかということ、そんなことは絶対無いんですね。

しかし、ヘーゲルの場合、ヘーゲルで哲学は終わったとか集大成されたと言われますが、ヘーゲルの本を読むと、現代世界の複雑さが、写真で撮ったようにクリアに見えてくる、そんな力を持っています。

マルクスはヘーゲルの弟子と言っていました。マルクスを読むより、ヘーゲルを読んだほうが、マルクスの思想が分かるともいえます。

しかし、ヘーゲルの本を読んだからといって、いまの社会が分かるかということやっぱり分からない。

つまり、現実世界は現実世界の持つ不思議な力によって構成されているのです。現実世界を前にして、私たちはそれを理解しようと思ったら、言葉をもってしか対応できないんです。だから、私たちは頭でっかちになる必要があるのだということです。筋肉を鍛えるだけじゃだめで、頭も鍛えなければならぬ。筋肉だってすぐ鍛えなければフワフワになりますね。頭も鍛えなければ、ふにゃふにゃになります。しかし、頭は筋肉じゃありませんから、どんなに鍛えても疲れぬし、筋肉みたいに弱らぬ。

頭脳トレーニングの一番いい方法は、仕事をする事です。仕事で頭を鍛えるのです。

大阪のサラリーマンの多くは、毎朝の電車通勤に、後ろズボンのポケットに競馬の新聞入れて行くんですね。それをみて、会社で何をするのかなっていつ

も思っていました。

会社では仕事が待っているから良いですが、家に帰ったら、みなさん仕事忘れるらしいんです。僕はそれはちょっと拙いなと思います。

私は、学校に行こうが家にいようがフルタイムで頭を動かすんだと思っています。頭を動かしていないときはお酒を飲んでごまかしてますけれども。そういう頭でっかちにある程度ならなければ、目の前の現実について、その複雑な裏側について考えられない、つまり私たちの持っている様々な能力を発揮できないと思うんですね。

したがって、なにか仕事をするときに、この仕事をどういうふうに進めたら良いのかという場面で、先輩とかに聞くということもあるでしょうが、一番手っ取り早いのはやはり本を読んできっかけを作ることだと、私は思っています。

大学もそうですね。授業で教科書を読んだり、それからテキストに関係するもの読んでも、それではまったく不十分なのです。大学時代に重要なのは学校で教えないことを本で知ることです。頭でっかちになることです。読んだ本は大学を出たらおそらく全部忘れるかもしれません。でも、頭の中に入ったものは、面白いことにいつか出てくるんです。私のように12歳のときに実は『罪と罰』を読んで、先生と議論をして完膚なきまでやっつけたという思い出がある。読んだことさえずっと忘れてしまいましたが、ちょうど先生が亡くなられて思い出したのです。いまは拙いことしたなと反省していますが、それでも、中学時代に読んだ『罪と罰』を、何十年後に思い出すんです。

本というのは何かというと、文字で記録されたもの、書かれたものです。そして、記録されたものが歴史なのです。歴史や考古学は何かというと、正解は「書かれたもの」、「記録されたもの」ということです。

最初の歴史書はヘロドトスという人が書いた『ヒストリアイ』です。ギリシア史ですね。「ヒストリアイ」は“歴史”ということですが、“記録”という意味です。チャイナには司馬遷の『史記』という本があります。『史記』も記録されたものです。つまり、記録されなければ歴史に残らないということなのです。坂本竜馬は今年大ブームです。私は去年無謀にも『坂本竜馬の野望』という本を書きました。なかなか良い本ですからぜひ買って読んでもらえるとありがたいと思います（笑）。

その坂本竜馬は、司馬遼太郎さんが『竜馬がゆく』を書き残さなかったら、おそらく私たちの目の前にちゃんとした形で残らなかった人物だろうと思います。あるいは、司馬さんが残した坂本竜馬があんまりにも素晴らしいので、ちょっとおかしいんじゃないかというので、津本陽という作家が『龍馬』を書きました。全5巻です。これもいい本です。いい本ですが、私の判断では司馬さんのほうがずっと上だなと思います。

しかし、司馬さんが書き、津本さんがさらに違った側面からの竜馬像を書かなければ、「坂本竜馬」は今日まで残らなかったでしょう。もちろん司馬さんや津本さんが小説を書けたのは、竜馬の手紙やメモなど、郷土歴史館などに所蔵されている資料が存在しており、それを土台にしたからでもあります。

口承文学という伝え方がありますが、私たちの考え方、生き方を記録に残せないのは、惜しいことだと思います。書物を読まないということは、違った世界に触れないことです。私の父とか母は自分の家の過去のことは知っていますが、織田信長がねえ…と言ってもそのあたりはどうも知らない。それは本でよんでないから確信が無いのです。その代わりに、延々と昔の話をしてくれました。それも面白いのですが。

つまり、私たち人類の歴史は長いですが、文字で書かれたものを持つことにおいて、初めて私たちは「人類の歴史」を持ったのです。

日本も『日本書紀』（『日本紀』）が、最初の歴史書として存在するからこそ、日本の歴史がうっすらと分かるのです。それを基に書きかえたり、まったく違うものを作ったり、そういう歴史をたどってきて、現代があるのです。そのような歴史的経緯とは全く別の世界の中に、いまの私たちがいるんだと考えてしまうと、これこそ頭でっかちになる。つまり本を読まなければ、現在の世界しかない。過去はなくなるんですね。

私と同年代に小泉純一郎さんがいます。たいへん素晴らしい人だと思います。しかし、小泉さんはあんまり本読んでいませんから、過去の伝統のことについてほとんど考慮しないんですね。根っからの民主主義です。小沢一郎さんも同じ年ですけど、やはり同じように根っから民主主義者。現在のことで全部決めてしまう。鳩山由紀夫さんはもっとすごい。あの人は理想主義者です。理想というのは、人類がずっと持ち続けるアイデアのことです。人間が終生持ち続けなければならない完成体です。そういう完成体を、日本の政治なり理想などと言うまえに、頭の中にパッとひらめいていたら、少しは違ったことができたかもしれません。

私は政治家を、勉強しない、本を読まないと馬鹿にしているのではないんです。彼らは、忙しくて本を読む暇がないと言うかもしれません。でも反論すれば、私たちは忙しいからこそ、本を読むのです。忙しくて、ちゃんと生きていないじゃないかと思うときに、ちゃんとした本が読みたくなります。暇なときは、それこそ漫画を読んだり、何かくだらない本もなんでも一緒に読みます。

人間は書物無しには人間であり得ないのです。人間は書物から出来上がっているというふうに私は考えていますが、それは現代人だけじゃありません。たとえば、紀元前 6 世紀に孔子が登場します。孔子の言行録が『論語』です。キリストの聖書も、新約聖書もキリストの言行録です。つまり、本人ではなく弟

子たちが史料に残したのです。だからこそ、いまも残っているのです。

そういう意味でいうと情報社会というのは、書物から離れた社会、本がなくなった社会ではなく、まさしく本という無意識に囲まれた世界といえます。

私は68になりましたが、残念ながらというか素晴らしいというか、パソコンのモニターで小説を読んでいるほうが楽なんですね。疲れない。昔は原稿用紙に書いていましたが、モニターの方がものすごく早く書けるし、読めます。なにより気分良い。紙は擦れる切れるが、モニターで手を切ることもない。いい社会になりました。

つまり情報社会っていうのは何かといえば、すべてが言葉を通じて成り立っている世界だということです。ある面では危険な世界でもあります。しかし過去とも現在とも未来とも、全部言葉で直接つながるような社会の入り口に、いま私たちはいるのだと考えてほしいと思います。

日本には、本をほとんど読まなかったが、「日本改造プラン」を立て、活躍した素晴らしい人物が2人います。

1人は織田信長です。日本が近代社会になるためのプランを考えていました。本人が書き残したのではありませんが、司馬遼太郎さんがそういうふうに言っています。そして、もう1人は坂本竜馬です。『船中八策』というプラン書を出しました。竜馬は18歳くらいまでほとんど本など読んでいません。13歳くらいまでは、“ネバタレ”といって、おねしょをしていたそうです。しかも弱虫で、塾に一日行っただけで行けなくなったんですね。馬鹿にされて恥ずかしくなり、行けなくなったんだらうと私は考えてますが。

実は、小沢一郎さんも1993年に「日本改造計画」という本を書き、その中で素晴らしいプランを掲げています。しかし、実現されてないというか、まったく違うことを、最近はやっています。

坂本竜馬に話を戻しますが、彼は本当に、阿呆で、弱虫で、そして本を1冊も読まなかったのか、というと、まったくそんなふうには考えられない。「船中八策」を読んでみたら分かりますが、よくよく考えられたプログラム（綱領）です。ちょっとやそつとでは書けません。福沢諭吉が『西洋事情』で、ヨーロッパの民主政体を紹介していますが、イギリスの民主政体を土台に、竜馬なりに考えた構想が「船中八策」です。のちに、このアイデアは明治憲法となって実現します。竜馬が死んでから20年後のことです。

しかし、なぜ竜馬は、本をほとんど読まなかったのに、当時の誰もが考えなかった、日本の独特の政治形態を考え付いたのでしょうか。

1つは彼の友人たちがみんな優秀で素晴らしかった。そして彼らはみな、竜馬を愛してくれた。

優秀だが、上から抑えられている人たちは、頭の悪い出来損ないを馬鹿にす

るものです。勝海舟がそうでした。人気は無かったのに、自分は日本で 1 番頭が良いと思っていた人です。15 代将軍の徳川慶喜と全然意見が合わなかったんですね。

竜馬の幼馴染みというか悪童仲間に、近藤長次郎がいます。饅頭屋の倅です。近藤は、江戸に従僕として留学を許され、最高の学者安積良斎に師事し、のちに武士のランクをあてられる。物凄く頭がよかったです。そして竜馬に率いられて、海援隊の前身の亀山社中に入り、そこで薩長連合の実質的な交渉役として活躍します。薩摩の名義で軍艦と鉄砲を買って、それを長州に引き渡すという、危ない、しかも外国人との取引ですから非常に工夫のいる実務を、彼は成し遂げます。

長州人っていうのはめちゃくちゃビジネスが下手だったんです。幕府が攻めてくるというので、軍艦と鉄砲が要るわけですけども、それを買える長州人がいない。それを長次郎が成功させたので、彼は後日、殿様から褒美を貰います。そして彼は、その褒美の金で、自分ひとりだけ密航し、イギリスに留学しようと企てます。もっと勉強をしたかったんですね。ところが、その船がいろんな事情で欠航してしまい、近藤の行動が亀山社中の仲間にばれてしまった。近藤は、仲間から抜け駆けを咎められ、結局、詰め腹、腹を切られるんですね。彼はもともと武士じゃありませんから、周囲からの嫉妬心もあったと思います。しかも事態は竜馬がいないときに起こりました。竜馬がいたらおそらくそんなことさせなかったと思います。

竜馬を勝海舟の門下に引き入れたのは、先に門下生になっていた近藤でしょう。竜馬は、近藤に非常に多くのことを学んだと思います。

竜馬が勝海舟に最初に会ったとき、彼は世界のことをだいたいは知っていました。しかし国家とか社会の仕組みについては確信が持てなかったんですね。おそらく近藤長次郎と議論しながら様々なことを考えたのだと思います。

もう 1 人が長岡謙吉です。この人も竜馬の幼馴染で、素晴らしい人です。おそらく縁戚関係だったと思われれます。医者でしたが、医者の仕事はあんまり好きじゃない。もっと勉強したくて、脱藩して長崎に行き、シーボルトなどに習ったりします。ですから非常に国際通。文献をたくさん読んでいます。「船中八策」は長岡謙吉の筆跡です。おそらく日本の国家政体が、天皇を戴く立憲民主制だと考え、竜馬に吹き込んだのは、長岡健吉じゃないかと思っています。もちろん竜馬はそれを理解したからですけど。

つまり竜馬は、積極的に本は読みませんでした。それは人と一緒に勉強するのが苦手だったんですね。では独学するかというと、それが可能となるには、自分の家に本があるか、あるいは図書館がないと無理です。

ちなみに谷沢栄一先生は、お母さんが本を買うお金をくれたそうです。父親

は大工さんで、中学1年くらいのときに、勉強部屋を作ってくれた。戦後すぐのことです。司馬遼太郎さんは、戦前から戦後にかけてずっと御蔵図書館という、大坂の真ん中の小さな図書館に通っていたそうです。小学生のときですね。

竜馬の時代は、自分で積極的に先生の門下に入り、塾で本を貸してもらわなければ独学などできなかつた時代です。だから竜馬は、自分の友だちの中に近藤長次郎とか、長岡謙吉とか、それからその他5、6人海援隊の仲間にはいますが、そういう人たちから多くを学んだのです。ただしそれは、彼らが竜馬を親分として見上げているという、そういった人間関係ができなければ非常に難しかったといえます。

先述しましたが、福沢諭吉の『西洋事情』ないしは福沢諭吉はのちに日本の民主国家のプランを描きますが、それと同じ思想を、諭吉よりもむしろ竜馬が先に言っていたのは、福沢諭吉の本を読んでいた人が身近にいたからです。

あるいは、竜馬も諭吉の写本を読んでいたかも知れません。同郷の中岡慎太郎が、自分の胸元にチラチラと西洋事情の写しをちらつかせて、お前こんなの読んだことないだろう、と自慢したという逸話があります。

とはいえ、中岡もそうですが、福沢諭吉の本を読んでいた当時の人間たちのなかで、幕府も藩も無くし、日本は1つの統一政府を持つ国であるなどという構想を抱く人間は、竜馬以外にいなかったのです。本を読むといっても竜馬のように読むか、西郷さんのように読むかで全然違って来る。

性別、年齢、宗派、身分、さらに藩も幕府もすべてを乗り越えて、近代社会というものを見つめるという、福沢諭吉と同じ考えを竜馬が持っていたのは、あるいは長岡をはじめとする仲間たちと考えることが出来たのは、本を読み解く力があつたからに他なりません。

もう少し言いますと、本を読んだ人たちと議論をしていくことによって、竜馬は、二次的に本を読んだのだらうと思います。そういう意味で言うと横井小楠などは竜馬より何十倍もたくさん本を読んでいたけれども、竜馬のほうが鋭い先見力をもっていたといえます。

つまり、ここでいいたいのは、「先生」を見いだすことの重要性です。それは先輩だけじゃなく同輩でも、後輩でもいいのです。中江兆民も、陸奥宗光も竜馬の後輩です。陸奥は竜馬よりずっと学力は上だし、家老級の家の子にもかかわらず、脱藩武士のしかも郷土身分の竜馬に対し、まるで犬がご主人に付き従っているように慕います。それだけの魅力が竜馬にはあつたのでしょう。

私は、竜馬のことを調べていくなかで、2つの背反する命題が成り立つと考えています。

一つは「本を読まなくても人生渡れる」こと。

そしてもう一つが、「本を読まなければ人生を、いろんな人間と交差をしな

がらあい渡ることができない」ということです。

竜馬は、薩摩も長州も幕府もなくもいい、という考え方をストレートに出したので殺されたのだと思っています。殺したのが幕府の人間か、長州の人間か、薩摩の人間か、それとも土佐の人間かいまも分かっていません。私は、中岡慎太郎が実行犯ではないかと推測しています。中岡は大久保利通と繋がっていました。そして、岩倉具視の手先のように京都で動いていて、幕府を倒すために軍事クーデターをやるんだということに熱中した人です。大久保も岩倉も、どちらも権威を重要視しましたから、このような仮説をもったわけです。

めちゃくちゃ頭が良く、努力家、勉強家で、竜馬と同じように革命運動に身を投じた中岡慎太郎は、竜馬に対して、バカタレとか、お前は理想が無いとか、その場限りであっちいったりこっち行ったりしているとか、利害ばかりを追っている腑抜けだとか言って議論を吹っ掛けるんですね。そして、お互、郷土佐をどうする、幕府をどうする、幕府はつぶしてもいいけども、長州藩と薩摩はどうする、その殿様はどうする、だれが政権を握るんだというふうに竜馬に詰め寄っていく。しかし最後は竜馬のほうが勝つ。議論するときの竜馬はすごい、切れ味鋭くなるんですね。

それは、竜馬が人のしないような読書をしてきた成果だと思います。竜馬の周りに、勝海舟とか、桂小五郎とか西郷隆盛とか、そういった違う読書暦のある人たち、あるいは物を見る力のあった人たちがいたことによって、初めて可能だったのではないかと思います。

さきほど、私は暇つぶしのために本を読むといいました。そういう時には面白い本を読みたい。どんな本でもいいのです。旨いものを食べたときの至福感と同じように、「ああ面白かった、また読みたい」と満足できる本が身の周りにあるかないかで、人生の楽しみは大きく違うものだと思います。佐伯泰英さんの時代小説は楽しむために最良の本です。ほとんど読んでいます。

それが高じて、つい最近、『佐伯泰英』大研究』（日経ビジネス文庫）という本を書きました。

佐伯泰英さんは、私と同じ 68 歳。時代小説を書き始めたのは 57 歳のときです。それまで 20 年間くらい、冒険小説などを書いていました。もとは写真家です。日大の芸術学部の映画コースで学んだそうですけども、九州は福岡の人です。

彼が時代小説を書くようになったきっかけが面白い。ある日、喫茶店に編集者から呼ばれるんです。新しい新作の注文かと思いきや、もう佐伯さんの本はうちの社では出せない、これきりだと宣告されてしまう。十何冊出したが、1冊も重版にならなかったというわけです。でも、官能小説か時代小説ならばなんとかなるかもしれない。どっちを書くかと言われるんですね。これが 56 歳の時で

す。そして 57 歳で初の時代小説を書いた。それから 10 年間で 130 冊の書き下ろしの文庫を出しました。合計 2,000 万部以上出ていますからすごいですね。そのうち『居眠り磐音 江戸双紙』というシリーズ本が 1,000 部以上で、現在 34 冊目です。ものすごく面白い。最近ある人に推薦したら、試しに読んで、あっという間に 30 冊くらい読んでしまった。これは麻薬であると言っていました。

村上春樹さんの小説も、宮部みゆきさんの小説も、題材ジャンルは違いますが、非常に面白い。どんどん読めるんですね。いまは情報社会、つまりグローバル社会ですが、村上さんとか宮部さんとか佐伯泰英さんの本は、日本の歴史の詳しい事情が分からなくても、現代人ならば世界中の人が、翻訳で読もうと日本語で読もうと、とっても面白い小説です。

一方で、司馬遼太郎さんの本は翻訳できないそうです。そんなことはないと思うのですが、翻訳しにくいというか、外国人にはなかなか分からない。日本の歴史のことが深く理解できなければ、ぜんぜん読んでも面白くないってことなのでしょう。

村上春樹さんは日本の小説は全然読まないで小説を書き、デビュー作の『風の歌を聴け』で「群像」新人賞を受賞しました。そのとき、村上さんは、「文芸雑誌を読んでみると、自分よりもみな下だから、私の小説は賞を取るんじゃないか」と思ったそうです。図々しいやつですね（笑）。彼は、カポーティの『冷血』とか、あるいはフィッツ・ジェラルドの作品。いまは村上さんが推薦して翻訳したことで勇名になりましたが、その当時、ほとんど知られていないマイナーな外国人作家を好んで読んできた。いい作品だとは思いますが。

つまり、彼が書いている小説は、村上春樹のまったく個人的な意見なのです。村上春樹にしか分からないのか、村上春樹だけが感じ取った世界を書いている。しかし、それが、広い人たちに、いわば通じていく。もちろん欠点を挙げようと思えば何でも挙げることができます。

俵万智さんが『サラダ記念日』という短歌集を出したときに、あんな歌なら私でも作れると、実際に 100 くらい作った人がいました。なかなか上手でしたが、俵万智さんが作ったから、誰でも出来ることがわかったんです。村上春樹のときも、ああいうかったるい小説は、俺でも書けるといった人がたくさん出てきました。しかし、結局は誰も書けなかった。大江健三郎さんも同じで、当時、大江健三郎さんのような本がダーっと出てきました。でも、残ったのは大江健三郎さんだけです。

これがいわば、言葉による発見なのです。

村上春樹さんは、いろんな社会の人たちに通じる、対話できる言葉を使って小説を書いています。これは、すごいと思います。小説の内容は、また別の問題で、村上さんも 60 歳ですから、どんどん変わってゆくでしょうけど、おそら

くノーベル賞は取るだろうと思います。カフカ賞を取っていますし。村上さんのように日本の作家にほとんど影響を受けてない、したがって日本の文壇で村上春樹を評価するとかしないとかという話題に上がらない、こういう作家が登場してきたことは興味深いことです。

宮部みゆきさんはどういう作家かという、ちょうどワープロが出現したときに生まれた作家です。宮部みゆきさんは、実は、むちゃくちゃ字が下手なんですね。顔もそれほど美しくない。

ぼくのちょっと下の友人で、今、プロの作家になった東直己さんって方がいます。ミステリーを書いている、非常に良いですよ。推理作家協会賞を取っていますが、おそらくもう少し経ったら直木賞も取ると思います。その東さんも、むちゃくちゃ字が下手なんです。東さんにサインしてもらった字はですね、そこだけ破って返したいっていうくらい(笑)。東さんに、もっと丁寧に上手く書いたらと忠告すると、丁寧に書けば書くほど下手になるって言うんです。

東さんは、北大文学部の哲学科を中退して、1985年くらいから、ワープロで小説を書き始めるんですね。そのころ私は、月刊「北方文芸」という地方文芸誌の編集責任者をやっていたら、東さんを始め若い作家たちがワープロ原稿を持って来る。そしたら、地方の小説家である某氏が、「ワープロで原稿を書くやつは、小説じゃねえ」と憤慨するんです。私は、いい作品だったら何でも良いんじゃないかと思いましたが、「原稿用紙にちゃんと鉛筆で書かなければ駄目だ」と、当時はそんなふうにする人がいました。いまは原稿用紙に書かれた小説なんて、だれも受け取ってくれません。めんどくさいですもんね。

そういう時代に、まだ20代の宮部みゆきさんが小説をワープロで書いた。凄いことに、最初から完成品なんです。『かまいたち』は「歴史文学賞」の佳作でした。

作家の井上靖さんも、戦後、『闘牛』っていう小説を書いて、雑誌『人間』の懸賞小説の選外佳作選ばれた。昭和23年のことで、その作品が、昭和25年に芥川賞を取ります。

宮部さんも井上靖同様に、最初から完成品です。小説書いたことはほとんどないけれど、パタパタパタとキーボードの文字を打っていったら出来上がってしまったわって感じで、凄まじい能力です。

松本清張さんの芥川賞受賞作『或る「小倉日記伝」』は、最初は直木賞候補作品だったのです。ところがそのとき、芥川賞候補に良い作品が無く、直木賞候補には良い作品はたくさんあった。それで審査員が、この作品は芥川賞に持っていこうということになった。選考場所は座敷つながっていましたから。こうして、松本さんは芥川賞を受賞します。つまり松本清張の作品は、いわゆる純文学と大衆文学どっちもいけるんです。ミステリーは純文学か娯楽小説なのか

という議論がずっとありましたが、つまり松本清張さんもそうですし、宮部みゆきさんもそうですが、大衆小説であり、しかも非常に品質の高い文学であるわけです。

宮部さんは多作です。時代小説も現代小説もどんどん書いている。政治も経済も金融もあらゆるものが出てきます。彼女は、まだ 50 代になったばかりですが、しかしもう 20 年以上書き続けています。なぜ、そんなに小説が書けるのかと不思議でたまりません。もちろん 1 人で書いていますが、ワープロで書いていることは大きいでしょう。誰でも書ける、誰でも読める、そういう時代に入ったんですね。

しかし、いつでも書けるいつでも読めると思ってしまうと、いま読まなければならぬという必然性がなくなる。若い子も年寄りも、本を読まなくなったのは、本に飢える必要がなくなったからでしょう。

こんなことがありました。谷崎潤一郎さんの初期の本を読もうと思い、通販で探したところ、全集 32 巻で、9,000 円で売っていました。しかし、バラ売りで 1 冊だけ買おうと思ったら 1,200 円するんです。僕はケチですから、9,000 円で全集を買いました。いまはそういう時代なのです。

ところが、いざ全集を買ってしまうといつでも読めるし、手元にあるから読まなくなる。これが難しいところです。ですから、いいなと思う本が出たら、単行本ですぐに買います。文庫本出たらそれも買います。そういう習慣づけをしていくと、自分の中に、慣性というか、瞬発力がついてくるんですね。

つまり、本を読むためには、何か問題意識があったり、何かしたいから読むというよりも、日常生活の中で習慣となるような、そういう衝動を自分自身で作っていくことが大切だと思います。

佐伯泰英さんは、1 年間に 10 冊以上本を書いています。1 冊の本を 20 日で書くんですね。1 日に換算すると 20 枚です。それも午前中だけで書いてしまう。朝 4 時ぐらいから起きて、仕事して、午前中に仕事を終える。20 日で 400 枚です。そして余裕があったら、午後に跨いで 2 冊目を書く。一度、体を壊したそうですが、そんな生活をしていて、本はいつ読んでるのか、仕事以外に何かしてるのか、と不思議に思いますね。しかし、面白いことに私たちは、忙しくなればなるほど本を読みたくなるし、普段のこととは違うことをしたいと思うようになるんです。私の経験だけでなく、一生懸命仕事して（独創的な仕事も含めて）、時間が無いという人ほど上手く遊んでいますし、本を読んでいます。

だから、政治家の人が、最近暇無くて本を読めないというのは、“三味線”と行って、本気にしちゃいけないと思いますね。

友人の一人で、東大を受けた男がいます。彼は、学校で全然勉強しないんです。俺なんか勉強しなくたっていいんだと言って、バスケットやったり相撲をや

ったりして遊んでいました。しかし、帰ってからは、むっちゃくちや勉強して  
いたらしい。そういうの“三味線”っていうんですね。俺は全然準備してない  
よ、だから落ちるかもしれないよと言いながら受かってしまう。私たちの時代  
には、こういう人間がいましたが、今はもっと進んでますね。情報があふれて  
いるから、逆に自分自身のほうから能動的に没頭していかなければ、本など  
いうものは読まないのかもしれませんが。

しかし、私のように、本の中毒になった人間は、本を読まないで死にそうに  
なります。

開高健には、芥川賞を取る前、小説を書いても全然売れないし、誰からも評  
価されないといった時代がありました。そんな頃、夜になると、谷沢先生のと  
ころに来て、風呂敷いっぱい本を借りて、背負って帰っていったといひます。  
そして読んではまた、新しい本を借りにくる。開高は、お父さんお祖父さんも  
亡くなって、家族を養わなくちゃいけなかったんですね。アルバイト、アルバ  
イトで学校に行く暇も無かった。開高は、その当時、自分は死にたいと思っ  
ていたけれども、自殺しなかったのは、本があったからだと後述しています。も  
う少し言うと、谷沢永一のおかげであると。

友人にとってみれば、こんな嬉しいことない。しかも谷沢先生をモデルにし  
て小説まで残していますから、たまらないですね。実は、谷沢さんは（開高健  
の）奥さんが嫌いだったんです。牧羊子という詩人だったのですが、その二人  
の間を巡って、開高健があっちいたりこっちいたりしてる。そういうこと  
を、三文記事、赤記事で読んだことがあります。しかしそれほど、開高さんと谷  
沢先生の間は本で結ばれていたということです。

僕も開高さんの本をたくさん読ませてもらいましたが、あるとき、編集者か  
ら、「お前、会わせてあげるよ」っていわれたのです。彼は私が開高のファンで  
あることを知っていましたから。しかし、そのときに、「いやもう少し有名にな  
ってから。もう少しまともなものが書けるようになってから会いに来ます」と  
言って断ってしまった。そのうち、開高さんは死んじゃったわけです。残念で  
したが、それはそれで良いんだと思います。人と人の直接の繋がりよりも、本  
と繋がることの方が、非常に良い繋がりが出て上がる。

開高さんと谷沢先生の場合は、2人だけの間には本だけしかありませんでした  
が、結婚して奥さんが入ってきて、難しい関係になってしまった。妙なことで  
すが、谷沢取るのか私取るのか、みたいなことになったようです。でもそうい  
う関係も含めて、水野晴男さんじゃないけれども、「本って素晴らしいね」と言  
ってみたいですね。

学生の方にとって、今日の私の話は、「学生と読書」にあまり繋がらなかった  
かもしれませんが。しかし、私自身は今でも学生であると思っています。ただし、

学生とは“学生（がくしょう）”のことで、まだ得度をしていないお坊さん学生（がくしょう）のことです。つまり谷沢先生とか開高さんとか司馬さんとかの本がある限り、私は甘んじて、否、喜んで学生（がくしょう）として、諸先生の本に接していきたいと思っています。そして、たまに、それをネタに、講演をしたり、本を書いてもいきたい。今日もそうやって、夜の福岡で飲もうかなというふうにも思っています。

つまらない話をおこないました。お時間が来ました。終わります。

## 質疑応答

<質問>

鷺田先生は、本を読むときに注意していることとかありますか。

<回答>

必ず赤鉛筆を持っています。どこで読もうと。印を付けるか否かは別ですが、1 ページに1 つくらい付ける気持ちで読む。そうすると、持たないときと持つときは、本への意識がまったく違います。持つときは、何かいいものを見つけようとして、前向きになるんですね。テレビとは全然違う。テレビはどんな良い番組見ても、3 日ぐらい経ったら忘れるでしょ。でも読んだ本ってね、突然また、ガーって思い出すんですね。ただぼうっと読むよりも、赤鉛筆を持って読むと凄く違います。これは谷沢先生も言っています。

それともう一つは、A4 の西洋紙ですね。何でもいいのですが、そこに感想まではいかなくても、自分の好きな文字、文章を書いて、ページ数もそこに書いていく。それは今でもはやっています。

<質問>

鷺田先生はたくさん本を出版されていますが、そのアイデアはどこから来るんですか。

<回答>

そうですね。だいたい、出版社から貰うんですけどもね。書けて。僕はどんなテーマでも書けると思っていますんです。すごいでしょ (笑)。自惚れです。書いたらすごく恥ずかしくなります。でもね、10 年くらい経つと、書いた本って…これはいいですよ。天才だったんだ、昔は (笑)、そう思います…思えます。それは間違いなく。だからみなさんも、読むだけじゃなくて必ず書いてください。恥ずかしくなりますから。大きなこと言えなくなりますから。でも、それが残っていて記録になる。歴史になる。そういうふうに思います。

だから、書こうと思って読むときは、これは集中して読みますよ。がんばったら、佐伯さんの本は 130 冊、1 日に 3 冊ずつ読みましたけどね。それでも時間かかるでしょ。400 ページの本を 3 冊読もうと思ったら大変ですよ。読み飛ばさないでね、ちゃんと読む。こういうふうだから、女房にはおかしいというふうに思われているかもしれません (笑)。

<質問>

お酒を飲みながら文章を書くとか、本を読みながらお酒を飲むとかありますか。どんなお酒が合いますか。

<回答>

… (笑)。私、ケチなんでね、読んだり書いたりするときは一切酒は飲みません。一生懸命がんばった褒美にね、飲むようにしています。5 時くらいから 3 時くらいまで、ぶっ続けで仕事しますからね。だいたいそれくらいでちょうどエネルギーが切れるんですね。で、補給するわけです。

それからお酒はね、お金無いときは飲みませんでした。なるべく良い酒を飲もうとはしました。今は純米酒。一番好きな酒はですね、「亀泉」という土佐の酒。それから金沢の「加賀鳶」ですね。この純米吟醸はおいしいです (笑)。… だめですかこれで。

いやあのね、飲みながら書いているとよく言われますけどもね、でもそれじでは、書き続けることできないだろうと思います。もう全体に… 人生のエネルギー切れですから、もうだめかもしれない。なんか最近そう感じました (笑)。